テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

FF14　備忘ログ(PATCH2.0)　ジョブクラス編

白魔道士クエスト

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

偉人の後継者

エ・スミ・ヤン ： ◇◇◇、優れた幻術士であるあなたに、頼まれてほしいことがあります。
「三重（みえ）の幻術皇」をご存知ですか？　我がグリダニアの最高指導者ともいうべき、
カヌ・エ・センナ様を長女とする、角尊の三姉弟……。
その次女ラヤ・オ・センナ様と、末弟ア・ルン・センナ様。おふたりが今、「エバーシェイド」に向かわれています。
かの地の「長老の木」に棲まう大精霊が、相次ぐ森への侵入者に怒り、我を忘れておいでになり……
その御心を鎮める「鎮撫の儀」をせねばなりません。
ですが……無謀にも護衛をつけずに出立されてしまった。儀式の準備さえ、完全ではないというのに、まったく困ったものです。
もちろん、おふたりとも優れた術士ではあるのですが……　近頃は魔物が増えていることもあり、心配です。
私の一存ではありますが、◇◇◇……　「エバーシェイド」に向かってくれませんか？
おふたりを追いかけ、手助けしてさしあげてください。

ラヤ・オ・センナ ： まいったわね……「長老の木」に近づけないわ。倒すそばから、魔物が湧いてくるじゃない。
まったくキリがないわよ、もう！
こんなことなら、やっぱり護衛を連れてくるんだった。今のままじゃ、さすがに手が足りないわね。引き寄せられてくる魔物が多すぎる！

ア・ルン・センナ ： そんな、諦めちゃ駄目だ、ラヤ・オ姉さま！

ラヤ・オ・センナ ： 当然！　なんだけど……　正直なところ、口で言うほど楽じゃないのよね。
……ん？　ちょっと、そこのあんた！　幻術士……エ・スミの手の者ね。ここらの魔物を片付けたいの、手伝ってくれる？

ア・ルン・センナ ： 姉さま、なにを！？　冒険者の力なんか、借りなくても！

ラヤ・オ・センナ ： あんたのこだわりもわかるけど……　今はまず、魔物を追い払うことを考えなさい、ア・ルン！

ラヤ・オ・センナ ： 「長老の木」があたしたちが近づくのを拒んで、魔物を差し向けているの！？
ア・ルン・センナ ： 冒険者さん、僕の邪魔はしないでよね。
ラヤ・オ・センナ ： とにかく、魔物の数を減らすのよ！

ラヤ・オ・センナ ： そ……それは、「ソウルクリスタル」！？　今は亡き偉大なる角尊、ア・トワ・カント様の遺物だわ！
彼のお方の遺志が、この冒険者を選んだというの！？
ア・トワ様は、前回の「鎮撫の儀」を執り行ったお方。……ア・トワ様の遺物が、後継者と認めたのよ！
角尊が密かに継承してきた「白魔法」の使い手たる者、すなわち「白魔道士」の証が「ソウルクリスタル」。
もしかしたら、ア・トワ様の導きかもしれない。
元々、「鎮撫の儀」は、3人の角尊……　いえ、3人の「白魔道士」によって執り行うものよ。つまり、冒険者が白魔道士の道を歩めば……。

ア・ルン・センナ ： だ、ダメだよ、中の姉さま！　「白魔法」は世の理を乱しかねない大いなる術。
角尊以外への継承は、固く禁じられているはずじゃないか！

ラヤ・オ・センナ ： ア・ルン、確かに伝統を守るのは大切なことよ。だけど、今はそれにこだわっている場合じゃないわ。
大精霊が暴走すれば、たくさんの犠牲者がでるのよ？

ア・ルン・センナ ： ……僕と姉さま、二人の力だけでも、時間をかければ儀式を成功させられるって言ってたじゃないか！
冒険者の手を借りる必要なんて……ない！

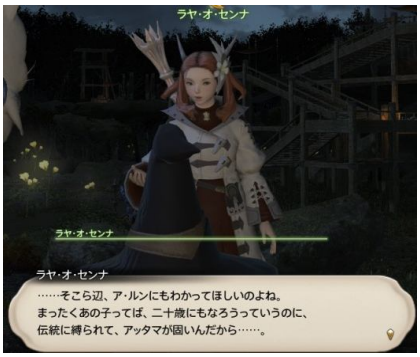
ラヤ・オ・センナ ： ……もう、頭が固いんだから、ア・ルンは。言ってることは一理あるだけに、説得に骨が折れそうね。
……ちょっと、そこのあなた！　聞いていたわね、今の話？　詳しく説明するから、「キャンプ・トランキル」まで来て。

ラヤ・オ・センナ ： さっきはありがとう。自己紹介が、まだだったわね？　あたしはラヤ・オ・センナ、見てのとおり「角尊」よ。
あんた◇◇◇よね？　前に工・スミから、名前を聞いたことがあるわ。優秀だっていう、そのカを見込んで頼みがあるのよ。
さっき、あたしたちが向かっていた「長老の木」……。あの樹の大精霊が、怒りに囚われつつあるの。
怒りに囚われた精霊は、人々に様々な害をなすわ。さっきのような、魔物の大量発生もそうよ。
怒れる精霊に、引き寄せられているの。
だから、大精霊を鎮めるための儀式、つまり「鎮撫の儀」を執り行いたいんだけど、
その儀式には本来、「白魔道士」が3人必要なのよ。
でも、今動けるのはあたしと弟のア・ルンの2人だけ。何とか2人で鎮めようと思ってたんだけど……。
……そこにあんたが現れ、あの地に隠されていた「ソウルクリスタル」に、白魔道士として選ばれた……！
これはきっと、ア・トワ・カント様の遺志！　自分の後継者としてふさわしい素質を持つあんたに、
「鎮撫の儀」に参加しろっていう……ね。
ア・トワ・カント様は、優れた白魔道士と名高いお方。でも、破天荒なお方で、掟に縛られることなく、
森を離れて人々や自然を癒やす旅に出たの。
その行いは立派だったけど、旅先で亡くなられ、未だにア・トワ・カント様の後継者は不在のまま……。
そんな時にあんたが現われた……これは天啓よ！
ただね、さっきア・ルンが言っていたように、「白魔法」は故あって、角尊以外へ伝承することを
禁じられていたの……そのことを、覚えておいて。
ま、堅苦しい話はここまで。ともかく、これからもよろしく頼むわね、白魔道士◇◇◇ ◆◆◆？
じゃあ、まずは習うより慣れろよ。しばらくは、白魔道士としての経験を積んでみて。
あたしから何か指南するのは、それからにしましょう。

森の嘆き

ラヤ・オ・センナ ： へぇ……前より白魔道士らしい顔つきになってる。でもまだまだ、今のあなたは雛チョコボみたいなものよ？
「鎮撫の儀」までに覚えること、いっぱいあるんだから。
そもそも、儀式をするためには、まず精霊と交感できるようにならないとね。
ちょうど、「エバーシェイド」の近くに、「長老の木」ほどの大きさではないけど、怒りに囚われた樹があるのよ。
この樹の精霊を鎮め、癒やしてあげてほしいの。樹に向かって手を掲げ、精霊の心と直接、交感するのよ。
その時、もしかしたら……　精霊の怒りが、魔物を喚んでしまうかもしれないわ。でも、恐れないで◇◇◇。
まずは魔物を追いはらい、心を落ち着けて、樹の精霊と交換すれば……　必ず怒りに囚われた心を鎮め、癒やせるはずだから。
あたしたち白魔道士の力は、癒やしのためのカよ。そのことを、決して忘れないで。

ラヤ・オ・センナ ： ……さっき、精霊の怒気が、ひとつ減ったのを感じたわ。見事にやり遂げたようね、◇◇◇。
精霊と交感して、その心を癒したことでわかったろうけど、黒衣森と精霊ってね、分けられないものなのよ。
今、黒衣森がおかしくなっているのも同じ……！　本来なら少し森が傷ついても、精霊たちが調和を保つの。
でも、精霊が怒りに囚われれば「敵」を排除しようとする。
「敵」とは、森にとっての異物……人もその内に含むのよ。だからこそ、長老の木に棲まう大精霊を鎮めなくては！　私たち、白魔道士がね。
そこには、種族や部族の違いなんて関係がないのよ。精霊と交感し、森を癒す……癒し手として、純粋にその「力」だけが求められるの。
……そこら辺、ア・ルンにもわかってほしいのよね。まったくあの子ってば、二十歳にもなろうっていうのに、
伝統に縛られて、アッタマが固いんだから……。
そりゃ、「角尊」としての立場やプライドにこだわるア・ルンの気持ちはわかるわよ……？
でも実際問題、それじゃ解決できない問題はあるんだもの。そろそろ、あの子にも納得してもらわないと……。
……よし、少し時間をくれる？　あんたのことをア・ルンが認められるように、ちょっと方法を考えてみるわ。



角尊の誇り

ラヤ・オ・センナ ： ◇◇◇、頼みたいことがあるのよ。ア・ルンについての話なんだけど、いいかしら？
ア・ルンが「角尊」じゃないあんたのことを、頑固に受け入れていないことは知ってるでしょう？
もう、あたしが何を言っても聞かないのよね。余計に話がこじれちゃうだけで……。
それであの子、あんたが要らないことを実証しようとして、ひとりであちこち出向いて、精霊を鎮めて回ってるの。
精霊を鎮めるのは簡単なことじゃないのに……。あんな無茶を続けてたら、いつか倒れちゃうわ。
心配よ……あの子は、周りが見えないところがあるし。
……お願い、◇◇◇。ア・ルンのことを、助けてあげてくれない？
それに、あの子のことを助ければ、ア・ルンもあんたのことを認めるようになるかも。
今、ア・ルンは「茨の森」に行ってるはずよ。あの子に何かあったら、カヌ・エ姉様に顔向けできない。頼むわね、◇◇◇！

ア・ルン・センナ ： き、君は……◇◇◇！　ラヤ・オ姉さまが、よこしたんだね？
はは……なんかみっともないところ、見られちゃったな。せめてあと1本……精霊の古木を癒そうと思ったのに、
疲れ果てて、一歩も歩けなくなっちゃったよ……。
もう、癒やすべき樹は目の前だっていうのに……　足がいうことを聞かないなんて……！

ア・ルン・センナ ： ……ちゃんと、精霊を鎮めたんだね。
一応……手伝ってくれてありがとう、と言っておくよ。でも、僕はやっぱり……。

ラヤ・オ・センナ ： ア・ルン、本当はわかっているんでしょう？

ア・ルン・センナ ： ラヤ・オ姉さまっ！？　どうして、ここに！？

ラヤ・オ・センナ ： あんたたちが心配で、追いかけてきたのよ。どうせ、素直になれないだろうと思ってたし。
ア・ルン……大事なことを見失ってない？
いい、大切なのは大精霊を鎮めることよ？　黒衣森を元通りに、平和で静かな森に戻すことよ？
だったら角尊だ何だなんてのは、小さいことじゃない。こだわってたら、肝心なときに失敗しちゃうわ。

ア・ルン・センナ ： う、うん……。

ラヤ・オ・センナ ： ふぅ、ようやく納得してくれたみたいね。あたしたちがやるべきは、大精霊を鎮めること。
そのために……3人で儀式をやる、そういうことよ。
じゃ、「キャンプ・トランキル」に戻るわよ。ここはもう大丈夫、心配いらないわ。

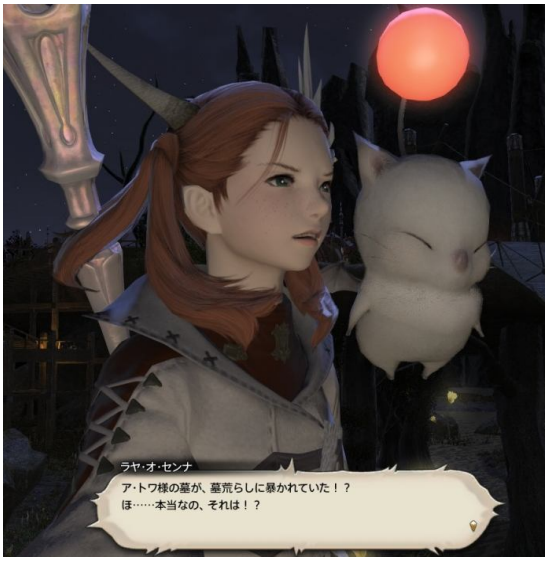
ラヤ・オ・センナ ： ア・ルンが頑なだったのにも、理由はあるのよ。それは……白魔法が「森を守るためのカ」であると同時に、
「森を滅ぼせる禁忌のカ」でもあるからなの。
……今から3000年ほど昔、「第五星歴」のころの話よ。当時は、恐ろしい「第五霊災」の寒波の名残で、
今と比べ物にならないくらい、世界は冷えきっていた。
それを乗り越えるために、人々は「魔法」を手にした……　「第五星歴」っていうのはね、そんな時代だったの。
人々は寒さをしのぐため、異種族との戦いのため、そして何より富と繁栄のために、より強い魔法を求めた。
それが破壊をもたらす禁呪、「黒魔法」よ。そして時を同じくして、黒魔法への抑止力ともなり、
癒しと浄化に用いるべく編み出された魔法があった。
わかるでしょう、それが「白魔法」ね。人々はふたつの強大な魔法の力を手に入れ、その文明は栄華を極めた。
でも、時が経つにつれて……白魔道士たちですら、さらなる繁栄のために白魔法を濫用し、森を汚しはじめた。
強大な魔法は、膨大なエーテルを消費するわ。濫用すれば、エーテルが枯れ果て、土地は荒廃する。
それは白魔法の行使でも、例外じゃないの。
だから、エーテルを枯渇させる一因である白魔法は、癒やしの力でありながら、禁忌とされたってわけ。
……でも、たったひとつだけ例外があった。
それが……あたしたち角尊なのよ。ア・ルンはね、白魔法を伝承してきた存在の末裔として、
角尊であることに、責任と誇りを感じているのよ……。
でも、ア・ルンもあんたの実力を見たら、なんとか納得してくれたようだし……　これで本格的に、「鎮撫の儀」の準備ができるわね。
「長老の木」に宿る大精霊が、まだ完全に怒りに呑まれていないとはいえ、儀式は早いに越したことはないわ。
元の静謐（せいひつ）な黒衣森を取り戻すためにも、あたしたち全員が協力し合うことが大事よ、いいわね？
あんたが受け継いだ「ソウルクリスタル」の持ち主、ア・トワ・カント様も、そう望んでいるに違いないわ。

偉人の足跡

ラヤ・オ・センナ ： ◇◇◇、そろそろ頃合いだわ。「鎮撫の儀」の準備を始めるためのね。
「長老の木」の大精霊と交感する時には、その強い力に負けないために、特別な装束が必要になる。あんたには、それを用意してほしいの。
これは、あたしが準備した装束よ。だけどこのままでは、何の力も持っていないの。
あんたにやってほしいのは、装束に力を吹き込み「鎮めの装束」として仕上げること。そのためには、エオルゼア各地を巡る必要があるわ。
ア・トワ様はね、角尊としては珍しく、森を出て癒やしの旅を続けておられたお方なの。そして、死後にゆかりの地に分骨されたのよ。
◇◇◇、あんたは後継者として、ア・トワ様の墓標を巡り、祈りを奉じて力を授かるのよ！
まず、「達観の墓標」は西ラノシアの海岸にあるわ。でも今では、海賊団「海蛇の舌」のアジトと化し、
「海蛇の巣穴」と呼ばれている状態よ。
「探究の墓標」は、モードゥナの「タングル湿林」よ。湿気が多くてじめじめした場所だから、墓標が痛んだりしてないか、心配だわ……。
そして「流転の墓標」の場所は、北ザナラーンよ。今は、「ラウバーン緩衝地」と呼ばれているあたりね。
帝国軍の基地のすぐ側になるから、油断は厳禁よ。

ラヤ・オ・センナ ： 無事、教えた3ヶ所の墓標から力を授かって、「鎮めの装束」として完成させたみたいね。
各地の墓には、ア・トワ・カント様のご遺骨が、分骨されて納められているの。
一般的には、ラノシアのオ・ゴモロ山で行方不明ってことになってるんだけど……、実は従者のひとりがね、ご遺体を回収していたのよ。
なんでも、コボルド族がひしめくオ・ゴモロ山を、その従者はご遺体を抱えて、決死の覚悟で突破したそうよ。
そのとき、残念なことに、カント家の家宝でもあった名杖「タイラス」が、失われてしまったのだけどね。
ともかく……グリダニアに戻られたア・トワ様のご遺体は、従者の手によって分骨されて、あの方の愛された、
ほうぼうの土地へと埋葬された、というわけ。
分骨された場所は、あんたが行った3ヶ所だけじゃないわ。黒衣森の「プラウドクリーク」近く……
そこには、「旅立の墓標」があるはずよ。

ラヤ・オ・センナ ： ア・トワ様の墓が、墓荒らしに暴かれていた！？　ほ……本当なの、それは！？
なんてことなの……　まさか「角尊」の墓を暴く、不心得者がいるなんて！　人心の乱れ、ここに極まれりよね……。
ともかく、荒らされてしまったものは仕方ないわね。墓荒らしの正体は、あたしのほうで詳しく調べておくから、
あんたは最後の墓標に向かってくれる？
場所は外地ラノシアの「コボルド軍試掘地」のすぐ近く。そう……ア・トワ様が亡くなった、
オ・ゴモロ山のすぐ近くに、最後の墓標があるわ。

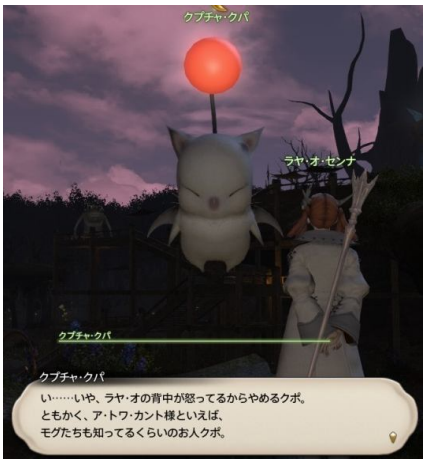


ラヤ・オ・センナ ： 戻ったのね、◇◇◇。ずいぶん遠いところまで足を伸ばしたから、かなり大変だったでしょう？
でも、あんたが訪ね歩いた墓標の場所こそ、生前にア・トワ・カント様の歩まれた、足跡なのよ。
「角尊」でありながら、黒衣森を出て、世界を旅し……そして果てたア・トワ様。
ただ、力を受け継ぐだけじゃない。あの方が何を思い、何を見ていたのか。
後継者であるあんたに、それを知っておいてほしかった。
それにしても……よもや、このグリダニアで墓荒らしなんていう、ろくでなしが出るとはね……。
……いえ、むしろグリダニアだからなのかも。角尊の尊さを知るからこそ、その墓を暴いた……？
何にせよ、捨て置くわけにはいかない。必ず、墓荒らしを見つけだすわよ、いいわね！

不埒者への報い

ラヤ・オ・センナ ： それにしても……酷い話もあったものよね。そもそも墓荒らしなんて、最低の行為だっていうのに、
よりによって「角尊」の墓から盗むだなんて！
絶対に許せない、必ず盗まれたものを取り返すのよ。いいわね、◇◇◇！
それでね、あんたが外地ラノシアに出かけているあいだ、あたしのお伴のモーグリに調べさせてみたの。
詳しくはそこにいる、「クプチャ・クパ」から聞いてくれる？

クプチャ・クパ ： クポポポポポ……まったく、ラヤ・オは5年経ってもモグ使いが荒いクポね。あんなだから嫁の貰い手が……。
い……いや、ラヤ・オの背中が怒ってるからやめるクポ。ともかく、ア・トワ・カント様といえば、
モグたちも知ってるくらいのお人クポ。
そんな人のお墓を荒らすだなんて悪いこと、絶対許せないクポから、あちこち声をかけて調べたクポ！
そうしたら、犯人がわかったクポよ～っ！　モグの友達が、盗んだ奴らを見てたんだクポ～っ！
犯人は南部森林の「レッドベリー砦」にいる、「似我蜂団」の連中だクポ！
今もモグの友達の「プクノ・ポキ」が、「レッドベリー砦」の近くで、そいつらを調べてるクポ！
急いで行ってみるといいクポよ！



プクノ・ポキ ： クポーっ！　きみがクプチャ・クパの言ってた白魔道士クポね？
まったく、酷い奴らがいるものクポ。「角尊」の墓を暴いて、盗みを働くなんて……　盗られたもの、絶対に取り返さなきゃだめクポ！
でもあいつら、金目の物じゃないと思ったクポ？　盗んだものを「盗品を積んだ荷車」に放り込んだクポ……。
ぞんざいに扱って、まったく酷いクポ！　ともかく、失われた遺骨をさっさと取り返して、ラヤ・オのところに持って行くクポー！

ラヤ・オ・センナ ： ひどいものね……。敬意もなく、ぞんざいに扱われて、なんておいたわしい……。
偉大なる「角尊」の遺骨が、こんな扱いを受けるなんて……絶対に許せない！
ひとまず、「似我蜂団」の処遇については、鬼哭隊に任せるとして……問題はご遺骨の状態よね。
ゆかりの地から暴かれ、安らぎを失ったことで、すっかりア・トワ様の力が感じられなくなってる……。
仕方ないか……。◇◇◇、ア・トワ様の遺骨は、あたしが責任をもって、もう一度、丁重に埋葬しておくわ。
それにしても……まいったわね。「鎮めの装束」に、力を宿す方法がなくなっちゃったわ。
少し時間をくれる、◇◇◇？　とりあえずア・ルンとも相談して、あんたの装束を何とかできないか、試してみるわ。

鎮撫の儀

ラヤ・オ・センナ ： ごめんね、◇◇◇。なんとか装束に力を与えられないか、ア・ルンといろいろ試してみたんだけど……。
……残念なことに、上手い方法が見つからなかったわ。ア・トワ様の力を借りなければ、装束に力を宿らせるのは無理なのよ。
はぁ……やっぱり、そうよねぇ。どうしようか、◇◇◇、ア・ルン？

ア・ルン・センナ ： ラヤ・オ姉さま、悩んでる余裕はもうないよ。

ラヤ・オ・センナ ： どういうこと？

ア・ルン・センナ ： 「長老の木」から、強い怒りの気配を感じるようになったんだ。いよいよ……限界に達しつつあるんだと思う。

ラヤ・オ・センナ ： そんな、じゃあ早く「鎮撫の儀」を……あっ！　◇◇◇の装束が、まだ……！

ア・ルン・センナ ： ここは「鎮めの装束」が欠けた状態で、挑んでもらうしかないよ。◇◇◇ならできると、賭けるしかない！

ラヤ・オ・センナ ： ……あんた、それでいいの？　てっきり「角尊」だけでやるとか、そういうことを言いだすのかと……。

ア・ルン・センナ ： ……前に助けられたときから、僕は◇◇◇を認めてるよ。立派な白魔道士だ、疑う余地なんてない。

ラヤ・オ・センナ ： ……そうね。だったらいいわ、「鎮撫の儀」を執り行うわよ！　「エバーシェイド」に急ぎましょう！

ア・ルン・センナ ： やるしかないんだ、◇◇◇。無茶な頼みをしてるのは、わかってるよ。でも……やらなきゃいけないんだ、持ち場について！

ラヤ・オ・センナ ： どうしたの、◇◇◇？　あんたの持ち場はこっちじゃないわよ！　早く、自分の持ち場に行きなさい！

ア・ルン・センナ ： だ、ダメだ！　大精霊まで、僕たちの声が届かない！

ラヤ・オ・センナ ： あきらめないで！　あたしたちがやらなきゃ、誰がやるの！？

ア・ルン・センナ ： で、でも大精霊が呼んだトレントたちが……！

ラヤ・オ・センナ ： くっ……交感に集中できない、このままじゃまずいわ。
◇◇◇、逃げなさいっ！

？？？？ ： 何をぼやっとしておる！　しゃっきりせんか、◇◇◇！！
「鎮撫の儀」はこれからじゃぞ、お前たち！

ア・ルン・センナ ： あ、あなたは……まさか、ア・トワ・カントさま！？　どうして、亡くなったはずなのにっ！！

ア・トワ・カント ： 説明はあとじゃ！　ア・ルン、ラヤ・オ、◇◇◇！　今は「長老の木」に集中せいっ！！
「長老の木」を癒やし、大精霊を鎮めるのじゃ！　怒りにあてられた魔物を片付け、儀式を再開させよ！

ア・トワの幻影 ： 今は「長老の木」に宿る大精霊に、言葉は届かぬ！　ただ森を傷つけられた痛みと怒りに、我を忘れておるのじゃ！
わしがお前たちを守る！　お前たちは「長老の木」を癒すことに専念するのじゃ！
ラヤ・オ・センナ ： ああもう、うっとうしい魔物どもね！　邪魔しないでよ、「長老の木」に集中できないじゃない！
ア・ルン・センナ ： はやく……はやく「長老の木」を癒さないと！　「長老の木」に集中するんだ！
ア・トワの幻影 ： 皆の者、もうひと頑張りするのじゃ！

ア・トワ・カント ： さあ、この隙に「長老の木」へ力を注ぎこむのじゃ！

ラヤ・オ・センナ ： 大精霊が……鎮まった……？

ア・トワ・カント ： うむ、そのようじゃな。みんな、よう頑張ったのう……見事じゃった。

ラヤ・オ・センナ ： ア・トワさま、生きておられたんですか！？

ア・トワ・カント ： いいや、今のわしはただの幻じゃ。◇◇◇の力を借りて、ほんのわずかな奇跡を授かっただけよ。

ラヤ・オ・センナ ： き、奇跡って……。

ア・トワ・カント ： わしのささやかな願いを、偉大なるマザークリスタルが聞き届けてくれたのかもしれん……。
……ラノシアで果てたことは、致し方ない。じゃが、そのとき、自分に跡継ぎがおらんことが、
ただひとつ……どうしても心残りじゃった。
そんな強い想いを、わしはソウルクリスタルに宿らせ、やがて後継者たりえる者が来る日を、待っとったのじゃ。
そして……◇◇◇に出会った。
お前ほどの者が、わしのソウルクリスタルを……、そして、わしの想いを継いでくれたのならば、
たとえ角尊でなくとも、心配はなにもない。
……む、むむむっ！？

ア・ルン・センナ ： ア・トワさま！？

ア・トワ・カント ： ソウルクリスタルに込めた力が尽きた……これまでじゃな。さらばじゃ、白魔道士◇◇◇。そして角尊の姉弟たちよ。
この黒衣森のことを、そして白魔道士のことを、これからもよろしく頼むぞ……！

ラヤ・オ・センナ ： 逝ってしまったわね……。

ア・ルン・センナ ： うん……ア・トワさまのおかげで、そして跡継ぎとなった◇◇◇のおかげで、僕たちも、黒衣森も救われた……。
あの方は黒衣森を出られたけど、きっと最後まで、森のことを愛しておられたんだね。
だから跡継ぎとなる者を、ここで待ち続けてたんだ……。

ラヤ・オ・センナ ： なんだ、あんた今頃それがわかったの？　あたしは最初っから、わかってたわよ。

ア・ルン・センナ ： ふふっ、そうだったね。姉さまはいつでも、全部わかってる人だった。

ラヤ・オ・センナ ： 「角尊」らしくありたい、あんたの気持ちはわかる。だけど、ア・トワ様のような「角尊」のありかたもある。
どっちも正しいんだと、あたしは思ってるわ。
さ、もういいんじゃない？　「長老の木」の大精霊を鎮めることはできたし、「キャンプ・トランキル」に帰りましょうか。

ラヤ・オ・センナ ： おつかれ、◇◇◇。色々と予想外のことはあったけど、なんとか、大精霊を鎮めることはできたわね！
それもこれも、全部あんたのおかげ。あんたがいなかったら、きっと不可能だったもの。
あんたには、心から感謝してるわ……ホントよ？　それにあたしだけじゃない、ア・トワ様もきっとあんたに感謝してるはず。
だって……ほら見て、この最後の装束！　あの方が消え去る前に、力を遺していってくれたみたい！
これって絶対、アンタに対するごほうびよ！
ありがたく、受け取っておきなさい。あと……ごほうびなら、あたしからも……ひとつ。
……白魔道士◇◇◇ ◆◆◆。
これまでに示したあなたの力を認め、「三重の幻術皇」ラヤ・オ・センナの名において、白魔法の奥義を授けます。
奥義「ベネディクション」です。道、違えることなく、使いこなしなさい。
……なんてね。あー、肩が凝るわね、こういうの。カヌ・エ姉様は、ホントよくやってるわよ。
ともかく、これであんたも一人前の白魔道士。濫用することなく、かつひとりでも多くの人を、
その白魔法で救いなさい……それが、あんたの使命よ。

登場人物

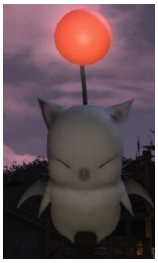
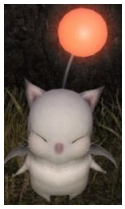
ラヤ・オ・センナ：三重の幻術皇で白魔道士

ア・ルン・センナ：ラヤ・オの弟

ア・トワ・カント：白魔道士

エ・スミ・ヤン：幻術士ギルドマスター

クプチャ・クパ ：モーグリ族。



プクノ・ポキ：モーグリ族。南部森林に出没